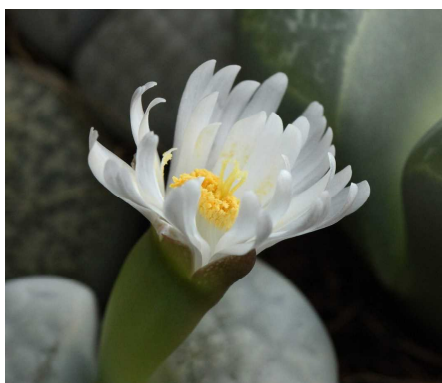


『今月の天候と農作業』

通巻第5620号
10月号
平成30年9月28日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

- ・期間のはじめは台風や前線、湿った空気の影響を受けやすい見込みです。このため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。
- ・暖かい空気が流れ込みやすく、向こう1か月の気温は高い見込みです。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	40
降水量	九州南部	10	30	60
日照時間	九州南部	40	40	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率60%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率50%です。

3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 9月29日(土)～ 10月5日(金)

期間のはじめは台風第24号の影響で雨となるでしょう。その後は前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすい見込みです。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 10月6日(土)～ 10月12日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4 週目の予報> 10月13日(土)～ 10月26日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

1 適期収穫等

収穫適期は、不稔籾を除いた全籾数の8割が黄化したときです。例年、刈り遅れの圃場が多いため、圃場ごとに籾色をよく観察し、適期収穫に努めましょう。収穫前の落水が早すぎると白未熟や胴割の発生を助長するため、収穫5日前の落水とします。

倒伏すると茶米や穂発芽が発生する恐れがあるため、全体の品質が低下しないよう刈り分けます。

2 乾燥調製

高水分の生籾を高温で急激に乾燥すると胴割粒が発生します。熱風温度は40度以下で、毎時の水分減少は0.8%以下で行い、仕上げの玄米水分は14.6～15.0%となるようにします。例年過乾燥の玄米が多いため、適正な乾燥に努めましょう。

また、複数の品種を扱う場合は、機械や袋等の清掃はこまめに行い混米防止に努めましょう。

◆大豆

1 排水対策等

湿害対策で排水溝を整備します。逆に干ばつ時は子実の肥大が悪くなるため、水が確保できるところでは畦間に走り水を行います。

2 病虫害防除

カメムシは生育後期まで莢を加害します。また、ハスモンヨトウは生育期間を通して食害します。圃場を観察し、農薬の使用基準に従い防除します。

◆ソバ

子実肥大期に入るため、降雨後に停滞水のあるところは追加で排水溝を設けるなど、こまめな管理が重要です。特に水田では周囲に溝を設置すると効果的です。

(荒砂英人)

施設野菜

◆共通事項

急な冷え込みに備え、暖房機をいつでも稼働できるよう準備します。また内張ビニルは早目に設置を終えましょう。

暖房用燃料を節減するためには、ハウス内の気密性を高めることが重要です。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認しましょう。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間がしやすいため、丁寧な作業を心掛けましょう。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期で、早いものでは側枝からの収穫も始まります。側枝の発生をよくするため、やや多めのかん水を行うとともに主枝の摘心が遅れないよう注意します。1回目の追肥は主枝摘心の1週間前に行い、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えるため、草勢が低下しないよう注意します。また、光線の透過を良くするため、主枝の摘心後より中段の葉から順次摘葉を行います。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。苗床では、徒長しないよう昼間十分日光にあて、本葉2.5枚以降は昼温25℃前後、夜間は14℃を下限に管理します。

◆ピーマン

促成ピーマンは整枝・誘引期になります。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合には、ねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めます。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えます。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限した管理を行いますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水は草勢を見ながら行いますが、かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失しないよう注意します。

◆いちご

今年は育苗期の高温の影響で炭そ病の発生が多くなっています。一方で定植時期、花芽分化ともに平年並みで、頂花房の発蕾は中旬前後と予想されます。同時期に第1次腋花房の分化期となるため、遅れないようマルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。追肥は10a当たり窒素成分で0.3～0.5kg/日を液肥で施用します。

(黒木正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆たまねぎ

翌春3月以降に出荷する作型の播種期です。本ぼ10aに対し、かん水ができ、排水の良い苗床を50㎡用意し、完熟堆肥200kg、苦土石灰8kg、窒素1・8kg、リン酸2・8kg、カリ0・8kg（いずれも苗床50㎡あたり）を施用し、中旬までに播種してください。播種後覆土し、十分にかん水した後は発芽まで乾燥しないよう新聞紙等で覆います。

◆しょうが

低温障害を受けやすいため、降霜の前に収穫を行います。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

◆食用かんしょ

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると肥大し過ぎて、いもの形や皮色が悪くなるため、植え付け日と生育日数を確認しながら収穫作業を進めましょう。

◆さといも

中生種の収穫と翌年の種芋の貯蔵を始める時期です。最後まで葉の生育が良好なものを種芋としましょう。枯れ上がり症状の見られたほ場、芽つぶれ症のあるもの、親芋の底部がスポンジ状になっているものは乾腐病の疑いがあるため、翌年の種芋としては使用を避けてください。

また、今年の疫病の初発には、残さ処理の不徹底によると思われる事例がありました。収穫が終わったさといもの畑の片付けは早めに行いましょう。残さの分解を進めるためにトラクター速度を遅く、ロータリー回転を早くし、できるだけ細かく破碎をします。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

◆ほうれんそう

加工用は厳寒期に収穫する作型の播種期です。地力の高い排水の良いほ場を選定し、十分な根域を確保するための深耕や表面排水を促すための排水溝の整備を事前に行います。また、除草剤は土壌が乾燥しすぎた状態では効果が劣るため、土壌水分が適湿の状態ですら散布します。

(杉村幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、かん水を行います。収穫後に秋枝が発生すると翌年の花芽に大きく減少するため、発芽が見られなくなる10月中旬を目安に実施しましょう。また、窒素成分主体の葉面散布は樹勢回復に効果が高いため、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

◆完熟きんかん

今年は、開花期加温の実施状況によって、結果時期に差が見られます。結果中心が7月中旬以降で果実肥大が遅れている園や、夜温が早く低下する中山間地域では、上旬までにビニル被覆を行い、昼間の温度は28℃、夜間は外気温よりも3度程度高い温度（中山間で18℃）を目安に加温することで、果実肥大を確保しましょう。

また、仕上げ摘果が終わっていない園地は早急に実施しましょう。

◆マンゴー

剪定が7月下旬以降の後期作型園では、新梢の発生や充実が遅れている園地が多く見られます。そのような園では、夜間の加温と昼間の高温管理、葉面散布により、新梢の緑化と充実を早めましょう。

近年、果実の軸腐病の発生が増加しています。樹冠内に残る枯れ枝に発生する黒色の胞子が軸腐病の原因です。ハウス内の胞子の密度を下げるため、加温が始まるまでに枯れ枝を取り除きましょう。炭そ病対策と併せて、施設内の剪定残さは全て施設の外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

◆礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花・結実が悪くなります。根が活発に活動している10月末までに施肥を行いましょう。

(鈴木美里)

花き

◆花き全般

10月に入ると夜温が徐々に低下します。特に、中山間地域では急激な夜温低下による降霜被害の恐れもあるため、施設栽培では暖房機のダクトを早めに設置してください。

また、このタイミングに合わせて微生物農薬のダクト散布を開始し、早くからの防除を心がけましょう。

◆キク

秋ギク「神馬」は、10℃以下の低温に遭遇すると、幼若性の獲得により開花遅延を起こす恐れがあるため、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。

また、年内出荷作型でも、親株が高温に遭遇すると、生育中の低温により開花遅延を起こす場合があるため、保温・加温を行いましょう。

◆スイートピー

中下旬から発蕾・開花が始まります。株ができあがっていない状態で開花させると、草勢が著しく低下して減収の原因になります。中旬まではしっかりとした株づくりに努め、収穫開始時期は葉の大きさや切り花の品質等から判断してください。

また、例年この時期は、曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等が発生しています。かん水間隔を徐々に広げて根域の確保に努めるとともに、遮光や換気といった高温対策もしっかり行いましょう。

◆デルフィニウム

中山間地では本格的な収穫が始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下するため、かん水や液肥施用を適宜行ってください。また、収穫後の前処理では、花落ち防止のために、品質保持剤の濃度や処理時間を厳守してください。

平坦地では中旬頃から発蕾が始まります。ボリュームを確保するために、かん水・追肥等適切な肥培管理を行ってください。

◆トルコギキョウ

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなるため、十分にかん水します。葉先枯れ症状（チップバーン）が発生しやすい品種は、草丈が10cm前後の頃からかん水を徐々に控えて根系の発達を促すとともに、定期的にカルシウム剤を散布しましょう。

また、追肥が後半にずれ込むとブラッシングの発生につながるため、発蕾までの期間に適宜追肥を行いましょう。

◆キイチゴ「ベビーハンズ」

気温の低下に伴って伸長量が増え、秋の本格的な収穫が始まります。樹勢の維持並びに翌年春の萌芽促進のため、株あたり3～5本程度のシュートを残し、それ以外で出荷規格に達したものを順次地際から収穫します。

なお、葉傷み等で出荷できないシュートは来年3月に芽吹きでの出荷が可能ですので、必要に応じて芽吹き用として残しておきましょう。

(藤原明紀)

畜産

◆家畜

朝夕と日中の寒暖差が大きい季節です。子牛、子豚、幼雛は温度変化に特に弱いため注意が必要です。適切な温度管理や換気を行きましょう。

3ヶ月齢までの子牛は寒さに弱く、腹部が濡れた状態では風邪などを引きやすいため、敷料をこまめに取り替えてください。

乳牛では、10月に入っても暑熱のストレスを受けます。ヒートストレスメーターをチェックし、温湿度指数が67より高くなる時は、牛舎ファンを回すなどの暑熱対策を続けましょう。

養豚では、疾病予防のため、豚舎の消毒はもとより、人、車両、物資の消毒を徹底しましょう。

養鶏では、冬場の鳥インフルエンザの発生に備え、防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行きましょう。出入り口の消毒、畜舎周辺の石灰消毒なども徹底しましょう。

◆飼料作物

飼料用イネの普通期栽培では、収穫時期を迎えます。収穫適期である糊熟期～黄熟期の収穫を行い、適正水分の50～65%でサイレージ調製をしましょう。予乾の目安は約1日です。水分が40%を下回ると乳酸発酵が進まず、サイレージの品質低下につながるため、乾かしすぎに注意しましょう。また、イタリアンライグラスやエンバクなど秋冬作飼料作物の播種時期になります。播種前に土壌分析を行い、土壌分析結果に基づいた肥培管理を行きましょう。近年、ゲリラ豪雨や局地的大雨が観測されるようになりました。ほ場に水が溜まると、湿害などにより飼料作物の生育を阻害します。圃場に長時間水が溜まる場合は、排水するようにしましょう。

(大山佐喜子)

工芸作物

◆茶

1 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて芽揃いが良く摘採が3日程度早くなる反面、12月～3月の凍霜害を受けやすいため、防霜施設の有無等茶園の立地条件と品種の早晩生等を考慮して実施します。

秋整枝の時期は、平均気温が18度以下になる頃を目安に行います。山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃となります。

近年、秋冬期の高温で秋整枝後に再萌芽する事例がみられますが、30cm四方内の再萌芽数が20芽以下であれば、収量・品質への影響は無視できます。

一方、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足は、収量・品質に影響が出るため適期を逃さないよう注意します。

整枝の高さは、最終摘採・整枝面から3～5cm上で、葉層を8cm以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一、二節高い位置で実施します。

2 病虫害の防除

裾刈りを行う際、チャトゲコナジラミ発生地域では、成虫飛来が終息後にやや深めに刈り落とします。更に、冬期防除（マシン油）を行うことで、チャトゲコナジラミとカンザワハダニの越冬密度低減を図りましょう。

なお、チャトゲコナジラミに対する問い合わせについては、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

（黒木清人）

◆しいたけ

1 水管理と環境整備

9～10月は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。この頃の原基づくりがしいたけの発生量に大きく影響しますので、ほだ木の水分補給に努めましょう。

また、暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にするとともに、風が強く乾燥しやすいほだ場は、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

2 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、その年の気象条件や立地条件によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

（古澤英生）

◆たばこ

本年の通常期販売も来月で終了となります。未出荷の方は出荷するまで、適切な貯蔵管理を行いましょ。今月は、来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 来年作の準備として、日当り・風通し・排水など、条件の良いほ地を早期に選定しましょ。

新作地や借地は、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施し、来年作の施肥設計の参考にしましょ。

2 冬期深耕及び耕耘作業は土壌環境改善と病原菌密度低下の為の重要な作業です。深耕・耕耘を繰り返し行い、耕種的防除に努めましょ。

3 良質堆肥10a当たり1200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を確保しましょ。未熟堆肥などは、I型グレーの発生原因となるため、脱塩処理を行いましょ。また、切り返しは適度な水分状態(60%前後)を保ちながら、月一回程度の切り返しを行い、腐熟促進に努めましょ。

4 出荷後は、来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫・作業場の整理整頓及び清掃を行いましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局(農業改良普及センター)へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等 チョウ目害虫	並	大豆やかんしょのは場では平年並み、フェロモントラップ調査では、一部で多く誘殺されていますが、全体では平年並みで推移しています。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるため、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	台風等による大雨で圃場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるため、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。
トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	いずれのウイルスも、微小害虫（タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマ）によって媒介されるため、施設開口部には必ず防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を防止します。これらの微小害虫は、一旦増加すると防除が難しいため、発生初期の防除が重要です。特に、ミナミキイロアザミウマが媒介する黄化えそ病(MYSV)に注意が必要です。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン 退緑黄化病(CCYV)	— —	
いちご	炭疽病、萎黄病 その他の病害虫	— —	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ばに病害虫を持ち込まないよう注意します。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシともに誘殺数は平年並みです。地域や時期によって発生量が大きく変動するため、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	黒点病 ミカンハダニ	並 やや少	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないため、発生初期（寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭）に防除します。 収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	並	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発達防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	並	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。
	チャトゲコナジラミ	—	成虫は新芽に、幼虫はすそ部古葉に寄生するためよく観察し防除を行います。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki です。</p>			

